

## 「やらされる」から「みんなで支え合う」へ

半田市立乙川中学校 P T A

### 1 はじめに

近年、学校現場では P T A 活動の在り方が大きく問われている。少子化や核家族化に加え、共働き家庭の増加により、保護者の多くが時間的・精神的に余裕をもてない状況が続いている。こうした背景の中、従来のように一定期間役員として活動することが難しい家庭も多くなり、P T A の役員選出は年々困難を極めるようになった。



P T A あいさつ運動

本校でも同様に、役員のなり手不足が深刻化し、「やりたくないのに引き受けざるを得ない」「活動が負担でしかない」といった保護者の声が寄せられるようになった。こうした現状を踏まえ、P T A 活動を根本から見直す必要性が生じた。

そこで、本校では固定的な役職制をやめ、誰もが無理なく関われるボランティア制へと方針を転換した。「誰でも・いつでも・気軽に参加できる P T A」を目指し、活動の内容や関わり方を柔軟に設計し直した。例えば、行事の手伝いや校内整備などを、短時間でも参加できる形にすることで、保護者が「できるときに、できる範囲で」関われるよう工夫した。

本研究では、こうした P T A 改革の実践を通して、保護者が前向きに学校と関わる姿勢を育み、学校と家庭との協働関係を再構築していくプロセスと課題について考察する。

### 2 研究への取組

本研究のねらいは、役員のなり手不足や保護者の多忙化という現代的課題に対応しながら、保護者が無理なく学校支援に関われる P T A の在り方を模索することにある。従来の P T A 活動は、年度ごとに選出された役員が中心となり、行事や運営における大きな負担を一部の保護者が担ってきた。その結果、活動に対して否定的な印象や「やらされ感」が根強く残り、特に役員の選出が大きな悩みの種となっていた。

本校では、こうした課題を共有し、組織の見直しと活動スタイルの再編に取り組むため、令和 6 年度 P T A 役員会において「活動の負担を軽減し、誰でも関われる仕組みを検討する」ことを正式に議題として取り上げた。P T A 組織は、会長・副会長・書記・会計などの役員 7 名と、活動実務を支える総務部員 7 名で構成されており、年度当初の協議を通じて、「固定的な役割にとられない、ボランティア型の運営への移行」を共通目標として掲げることと

なった。

この目標をもとに、活動全体の見直しを進めるにあたり、まず初めに行ったのは保護者へのアンケート調査である。内容は、P T A活動に対する印象（良い点・改善点）、参加しやすい活動の条件、希望する関わり方（単発参加・継続的支援など）など多岐にわたるもので、約6割の家庭から回答を得ることができた。特に、「時間が合えば協力したい」「役職は無理でも関わる意思はある」といった声が多く寄せられたことは、ボランティア制への転換に大きな後押しとなった。

次に、他校の先進事例や文献資料の調査も行い、全国で進んでいる「任意参加型P T A」や「L I N EやS N Sを活用したゆるやかなつながりによる支援体制」などを参考にした。また、学校運営協議会や地域子育て支援団体からも意見を取り入れ、多様な立場の関係者と意見交換を行いながら、学校支援のあり方を柔軟に捉える視点を養っていった。

さらに、P T A役員・総務部員による定例協議を通して、「誰でも・いつでも・気軽に関われる」活動モデルを複数設計し、その中から「実現可能で効果的」と判断されたものを実施することとした。本年度の活動の主立ったものは「あいさつ運動・ほっとおっカフェ」、「制服リサイクルバザー」「闇バイト防止啓発活動」といった学校支援活動である。

### 3 実践内容の概要（3つの柱）

- （1）学校運営協議会とP T Aが連携した「食」の提供を通じたカフェ活動（ほっとおっカフェ）
- （2）S D G sの視点を取り入れた制服リサイクルバザー
- （3）P T Aと警察・県少年補導委員会が連携した闇バイト防止（青少年健全育成）の啓発活動

本校P T Aでは、保護者の多様なライフスタイルに対応しながら、学校支援をより柔軟かつ意義ある形で進めることを目的に、いくつかの新たな実践活動を行ってきた。これらの活動は学校運営協議会や地域機関とも連携しながら展開し、従来の「役割をこなすP T A」から「学校や地域と協働するP T A」へと変化していく契機となった。

まず一つ目は、あいさつ運動・カフェ運営を通じた地域コミュニティづくりとしての「ほっとおっカフェ」である。これは学校運営協議会との連携により実現した取り組みで、P T Aボランティアと教職



ほっとおっカフェの様子

員、学校運営協議会委員が協力し、あいさつ運動に参加した方々に軽食や飲み物を提供する活動である。「おっカフェ」は“乙川”と“ほっとできる場所”をかけた名称で、「食」とおとしたコミュニケーションづくりの場（食ニケーション）としている。この活動はPTAが主導する形で立ち上げられたが、現在では保護者だけでなく地域の高齢者や区長、老人会も加わり、多世代交流の場としても発展している。活動の様子は定期的に学校便りやHPを通じて発信し、参加者の口コミも相まって、活動は安定的に継続されている。



生徒と栄養教諭調理のカフェご飯

二つ目の取り組みは、SDGsの観点を取り入れた「制服リサイクルバザー」である。近年、SDGs（持続可能な開発目標）への教育的関心が高まる中、PTA活動でもその視点を取り入れようという声があがった。そこで、卒業生や転出者の保護者から提供された制服・体操服・上履きなどを整理し、必要とする家庭に無償で提供するバザーを年1回開催している。この活動は経済的支援の側面だけでなく、「ものを大切にする」「必要な人に届ける」といった価値観を子どもたちにも共有できる機会となっている。また、PTA役員以外の保護者や地域ボランティアの参加も促し、整理・陳列などを役割分担しながら行うことで、多くの家庭が無理なく関わられるよう工夫した。



制服リサイクルバザー

三つ目は、PTAが半田警察署や少年補導委員会と連携して行った「闇バイト防止啓発活動」である。中学生や高校生をターゲットにした闇バイトの勧誘が社会問題化する中、保護者にもその実態を知ってもらう必要性が高まっていた。そこで本校では、PTAと生徒会、半田警察署が話し合い、生徒会考案の啓発キャラクターの作成や、地域住民すべてを対象とした講演会、生徒が作成した啓発VTRの放映などの啓発活動イベントを開催した。また、生徒会と連携して学校掲示板に児童・生徒向けの注意喚起メッセージを掲示するなど、学校全体で啓発の気運を高めた。PTAが

**【闇バイト加担防止イベント】**

**ヤミ 8/3は何の日？**

【日程】8月3日(日)  
【場所】乙川中学校 体育館（半田市大池町3-1）  
※駐車場は乙川中学校をご利用ください

【時間】9:30 開場・受付開始  
10:00～12:00  
・警察による闇バイトクイズ  
・授賞式（乙中生によるキャラクター応募）  
・講演会（講師：新海岳人氏）  
・乙中生制作の闇バイト加担防止VTR上映会

【定員】800名（先着順）  
【申込み】下記QRコードより必要事項を入力の上お申込みください

**新海岳人さん講演会**

講演会テーマ「差しく働く未来のために、今すべきこと、すべきじゃないこと」

新海岳人（しんかいとくと）  
半田市出身のアニメーション監督

お申込みはこちらから  
一般応募フォーム  
申込期間 7/13～8/2

PTA作成のPRチラシ



このような社会的課題に関わることで、単なる学校内のサポートにとどまらず、子どもたちを取り巻く広い環境に目を向ける契機となった。

これらの活動に共通しているのは、「無理なく・気軽に・意義を感じながら」関わられるよう設計された点である。従来の役職や常任委員会中心の構造を見直し、活動の内容を目的ベースで再構築することで、参加者の負担を軽減すると同時に、学校とのつながりを実感しやすくした。実施後のアンケートでも、「初めて参加して楽しかった」「子どもの学校での様子を知るきっかけになった」といった声が寄せられ、今後のPTA活動のあり方に大きな示唆を与えるものとなった。



闇バイト加担防止啓発活動

#### 4 おわりに

これまでPTA活動は、「やるべきもの」「役割を果たさねばならないもの」といった義務的な側面が強く、保護者にとっては負担と感じられることも少なくなかった。しかし、本校で取り組んできたボランティア制への移行や実践活動を通して、「できるときに、できるかたちで」関わるという新しいスタイルが、保護者にとっても学校にとっても前向きな効果をもたらすことが明らかとなった。

「ほっとおっカフェ」のような朝の居場所づくりでは、保護者と教職員、さらには地域住民との新たなつながりが生まれた。「制服リサイクルバザー」では、持続可能な社会を子どもたちと共に考えるきっかけをつくり、「闇バイト防止啓発活動」では、学校を越えて地域全体で子どもを守る意識が育まれた。これらの活動は、いずれも従来の「PTAの仕事」の枠を超えた価値を生み出している。

また、保護者が参加しやすくなるためには、活動の「目的」と「意義」がわかりやすく伝わることが重要である。単なる労力の提供ではなく、「子どもたちの成長に直接関わる喜び」や「地域の一員としての誇り」を感じられるような仕組みこそが、持続可能な支援活動につながるのではないだろうか。

今後もPTAの在り方は、家庭や地域の状況に応じて多様化していくことが予想される。その中で大切にしたいのは、「誰かが頑張るPTA」から「みんなで支え合う学校支援」への発想の転換である。教職員としても、保護者の声に丁寧に耳を傾け、協働のパートナーとして信頼関係を築いていくことが求められる。

学校を支える主体は教職員だけではない。保護者や地域と共に歩むことで、学校がより開かれた、温かみのある場となるよう、今後も対話と工夫を重ねながら支援のあり方を探っていきたい。